

祝開場55周年

理事長挨拶

塩原カントリークラブ

理事長 渡邊 勇雄



開場55周年おめでとうございます。当クラブは昭和44年4月、栃木県内で14番目のゴルフ場としてオープンしました。その後55年の間に、ゴルフ場業界は経済不況や近年では新型コロナウイルス感染症等による経済世界不況に何度も打撃を受けてきました。その都度、地域の関係機関をはじめ会員の皆さんの暖かいご理解とご声援を頂き今日を迎えることが出来ました。心から感謝申し上げます。

さて、開場50周年の記念誌時には、塩原カントリークラブ理事として「クラブハウス建設の思い出」という題目で当時の建設現場監督としての思い出を語らせていただきました。あれから5年の月日が流れたことを思うと、「あっという間」の時間が経過したんだと実感する次第です。

2022年には、いちご一会とちぎ国体が開催され、当クラブでは女子競技が開催されました。雨の降りしきる中、滞りなく2日間競技が実施され、各都道府県のゴルフ場関係者の方々から一定の評価をいただけたことがつい最近のように感じます。

いちご一会とちぎ国体後には、乗用カート乗り入れが開始されました。懸念されていた芝の状態も良好で安堵致しております。開場55年を迎えて、心新たに皆さんのためのコース作りに邁進して参ります。

会員の皆様におかれましては、ご家族・ご友人をお誘い合せの上、ご来場戴きますようお願い申し上げます。

末筆となりましたが、会員の皆様とご家族のご健康、ご繁栄を祈念申し上げ、開場55周年のご挨拶とさせて戴きます。



那須良輔さんの会報挿絵の原画展 ロビーでミニ展覧会。

開場55周年を記念した4月13日、14日の両日の記念コンペが開催され、合計427人が参加して開場記念を祝った。これにあわせて昭和の塩カン会報に挿絵つきでエッセーを投稿してくれた昭和の漫画家・那須良輔さんの原画14枚を、クラブハウスロビーに展示し、原画展が開かれた。

いずれも墨で描かれたものだが、昭和の塩原カントリークラブのコースの雰囲気があふれる絵柄の数々。プレーヤーやキャディーさんの服装も往時の面影を偲ばせていた。コース周辺の景色やコース内の松も見事に描かれており、松の枝や飛び交うカラスの姿などもユーモラスに捉えられ、足を止めたプレーヤーの笑顔を誘っていた。

塩原カントリークラブではカートのコース内乗り入れに加え、女子のオールドシニア向けに設けられたピンクティーにヤード表示も整備され、高齢時代に合わせ、シニア・ファーストの環境も整い、60周年に向け新時代入りした。



2024/4/13撮影

参加チームのレディース会など目白押し。関東女子倶楽部対抗県予選 5月23日に開催。

2024年度の関東女子倶楽部対抗競技大会県予選が5月23日(木)に、塩原カントリークラブなど22チームが参加して、南・北コース18ホールで開催される。

県内の女子プレーヤーにとっては、この競技会で上位に入ることが栄誉のひとつとなっており、上位3チームが関東決勝大会に出場する。

コース管理の一環として、このほど、オールドシニア向けのピンクティーの全ティーグラウンドにヤード表示を設置し、高齢者ファーストの環境づくりも整った。また、女子倶楽部対抗など競技会に向けても、コース内にセンター出し、200、150、100ヤードなどのマーク付けも終えた。

このマークはもともと各地点に目印が埋め込まれているが、コースの芝が伸び始めると見えなくなるため、ペンキでマルを表示する。4月になると芝の伸びが早くなり、表示が隠れてしまうため、10日に一回程度は表示のし直しが欠かせないという。参加チームの事前の練習を兼ねたレディース会の申し込みも多く、大会にふさわしいコース作りに万全を期している。

関東決勝大会は6月17日に鶴舞カントリークラブ(千葉県 市原市)で開催される。



クラブハウスの屋根 化粧直し終える。

クラブハウスの屋根の全面塗り替えが、この冬季に行われ完了した。これまで部分的にサビが目立ち、一部では雨漏りも出ていたため全面的に塗り替えた。屋根全体が明るく目立つようになり、レストランのテラス前の満開の桜に一段と映えるようになった。

ただ、今冬は2,3月に強風の日があり、ロッジなど付属施設の屋根が飛ばされる被害が相次いだ。2月には散水用のポンプ倉庫、ロッジの屋根の一部が剥がされ、3月には中コースの茶店の屋根の一部が飛ばされ、それぞれ応急修理でしのいだ。



2024/4/14撮影

功罪相半ば 枯れ松の伐採処理

松食い虫の被害に遭った枯れ末の伐採処理が一段と進み、練習場脇の玄関前への誘導路の両サイドの10本近くが処理され、クラブハウスへ見違えるほどの見通しが開けた。

また残念なことに、玄関前の夫婦松のうち向かって左側の松に赤テープが巻かれ、伐採処分候補となってしまった。直ちに倒壊などの危険性はないため、当分、テープで注意喚起を呼びかけるだけにする。いずれは、伐採処理後の処置に頭を痛めそうだ。

すでに、コース内での伐採はすでに終了の見通しがついたが、会員歴の長いメンバーからすれば、見慣れた景色が失われたとか、コースを攻める目印がなくなったなど不評の声も聞かれない訳でもない。しかし、コース管理上は松の伐採により、日差し具合が改善され、降雪時の雪解けが早くなったほか、これまでは日陰の時間帯が長く、芝の育ちが悪く荒れ地だった部分がかなり減っているという。

今後もしばらく続くとみられる松食い虫による枯れ末の処理の功罪は、相半ばしているともいえるかもしれない。





塩原カントリークラブ！攻略編！！【南コース】 — 中里 鉄也プロ — ☆ 南コース 6 番 ☆



長いショートホール。

1打目はグリーン右のバンカーと松の木の間の花道にアドレスをとりたい。

グリーン右奥、右手前から傾斜があるので外すのならグリーン左か手前が良い。

ピンの位置によっては右手前のバンカーでも良いが手前にピンがある時はバンカーに入れたくない。

グリーンはカップを左側から狙うと曲がりが少なく右端から狙うと曲がりが多く読むのが難しい。

次回は、南コース 7番を紹介します!!

那須の小天狗—小針春芳伝 23

井上 安正

杉本英世は、日本オープン、日本プロ選手権などで年間6勝を挙げ、華々しい戦績を残すと同時に、ゴルフ場の設計や監修にも実績を残した。北海道から九州まで25コースにのぼり、テレビのレッスン番組、解説などでも、幅広い人気を呼んだ。アメリカツアーに参戦して、多くのコースを見聞し、試合で回ったことが、深いゴルフ理論と設計思想に結びついた。

栃木県大田原市にある千成ゴルフ倶楽部は、「ビック・スギ」の自信作という評価が高い。緩やかな丘陵の高低差を生かしたフェアウェイと那須連山の眺望を楽しめるチャンピオンコースで、1976（昭和51）年にオープンした。杉本はそこの副社長にと声がかかったが、それを断って専属プロになり、よくここでラウンドやレッスンをやり、男子のプロテストやチャレンジツアーの舞台にもなった。

にじむ敬愛

ある日の夕方、江場友幸の「エバゴルフ工房」に、出入りしていた若いプロから、電話が入った。「千成へ来てくれませんか。杉本プロが『クラブを見て欲しい』と言っているんで」という。杉本がクラブの調子がしっくりしなくなり、次の日の朝からのプレーに備えて直したいと言い出した。「どこかに修理と調整をしてくれる人はいないか」と聞かれ、「います。私が世話になっているところでよければ」と答えた。



「すぐ、来てもらってくれ」と言われて、電話をよこしたのだという。江場は芝の練習場で、杉本プロからコーヒーをごちそうしてもらったことを思い出し、二つ返事で車を飛ばし、千成の支配人の案内でクラブハウスの二階に上がった。どっしりと構える杉本プロに、江場は「お久しぶりです」と深く頭を下げた。顔を合わせても、杉本プロは怪訝そうに見ていた。「前に会っているの」と聞かれ、「ハイ。学生のころ、芝の練習場で……」と答えた。

「アッ、思い出した。『佐々木先生に教わっている』と言っていた」。ゴルフのプロは総じてせっかちだ。思い出話もそこそこに、ゴルフバックを預けられてしまった。「明日の8時までには、直して届けてもらって、君も一緒に回ろうよ」と誘われた。江場はウッドのシャフトを交換し、他のクラブをすべて調整して8時半に届けた。それを機に杉本プロがエバモデルのクラブを使ってくれた。ゴルフ雑誌の杉本が企画した記事の中で写真を使う時は、わざわざエバゴルフのロゴがアップで写るように工夫してくれた。

西那須野カントリー倶楽部(那須塩原市)でシニアの大会があつて、久しぶりに試合に出た杉本が優勝した時だった。杉本から電話が入って、「西那須野にいる。すぐ来いよ」という。声がはずんでいたのも、悪い話ではないと思って、車で30分ちょっとの西那須野カントリー倶楽部に出向いた。クラブハウスに着くと、顔見知りの若いプロが2、3人いた。杉本プロ本人は、ゴルフ記者に囲まれてインタビューの最中だった。顔が合ったので、江場は右手を上げて軽く会釈をして近づいた。

「今日は良かった。優勝したよ」。杉本プロも久しぶりの勝利に興奮気味だった。目を転じると、人混みから距離をおいて、小針が1人、所在なげに椅子に座っていた。江場は小針から「どうしてここにいる」と聞かれた。「(杉本プロを指差して)呼ばれました」と答えた。小針は「お前ら知り合いだったのか」と驚きを隠さなかった。

江場は杉本プロとの間の、芝の練習場での出会いからのいきさつをかいつまんで話した。記者対応が終えて、小針春芳のもとへあいさつに来た杉本プロと3人で、顔を突き合わせるようにして話し込んだ。「どういう取り合わせ」。若いプロやゴルフ記者達のヒソヒソ話しがかすかに耳に届いた。

江場にとっても、小針にとっても楽しい歓談のひとつときだった。別れしなに小針が冗談めかして、杉本プロに向かって言った。「お前さんも金もうけばかりしてないで、もっと試合に出たら。まだまだ勝てるんだから」。ゴルフ場の設計に、その監理、テレビ解説、レッスンにと、飛ぶ鳥を落とす勢いの“ビック”も、ズバリと言われて、大きな体をすぼめるばかりだった。

“ビック”が合格したプロテストの朝、パットグリーンで小針から受けたアドバイスの一件について、江場は兩人から別々に聞かされ、胸の内にしまい込んでいた。「(自分は)師匠もいなければ、弟子もない」と、口癖のように言っていた小針。プロゴルファーの間では、素人には計り知れない上下関係の厳しさがある。しかし、この時の小針の眼差しと杉本の姿に、それを越えた「師弟愛」と「敬愛」のようなものが通い合うのを感じた。



精進の証

小針の人並みはずれた精進ぶりを証言するプロがいる。今はテレビのレッスン番組や解説で知られる青山薫である。重症のパッティングイップスに苦しんでいた頃、「週刊ゴルフダイジェスト」の編集長が、「怪人イップス青山薫の東奔西走」というタイトルで、パットの名手からその克服策を聞き、誌面化する企画だった。

その取材で初めて小針に会った。1990(平成2)年のことで、小針が関東ゴールドシニアで中村寅吉を下して優勝した年だった。青山はその試合会場で、小針、小野光一、森田吉平の3人の先輩から練習グリーンでレッスンを受けた。困ったことに、小針の言う通りに打つと、小野が「違う、違う、それじゃだめだよ」。小野の言う通りすると、森田が「だめ、だめ、もっと目玉をめんめくって」という。「めんめくって」は、「集中して」という意味のどこかの方言だったろうが、青山はどうやったらいいのか途方に暮れたという。

それ以来、青山は小針と親しくしてもらうようになり、那須のゴルフ場の支配人兼所属プロになってからは、何度も那須ゴルフ倶楽部のプロ室でゴルフの極意を聞く機会に恵まれた。プロ室には万力やグラインダーやグリッパがところ狭しと置かれているのに驚かされ、アプローチが出来る練習グリーンでアプローチの手ほどきを受けた。

ある日、青山のもとに小針から電話が入った。「青山君、飛距離が落ちて来たので、何とかならないかなあ。教えてくれよ」という。瞬間、青山は80歳を超えてなお食欲にゴルフに取り組む姿勢に頭が下がった。「小針先生にレッスンなんて出来ないないですよ」と断ったが、小針がほどなく青山のもとにやって来た。

青山は清水の舞台から飛び降りるような気持ちで、練習場でスイングを見せてもらった。そこで互いに納得したことは、長いゴルフ人生で小針の両手の指が曲がったままになって、思うようなグリッパが組めないようになってしまったことだった。それでも小針は、少しでも飛距離を伸ばすような工夫を重ね、レッスンは2時間にも及んだ。帰りしなにキャディバックから「KOBARI」のネーム入りのボールを取り出し、「これ、使いな」。とてつもなく嬉しかったのと、話しかけると「うん、そおう」と応じてくれたのが忘れられない。

江場友幸も青山薫が見たような、小針の指の酷使の“勲章”を確認したことがある。工房に顔を出した小針の右手の親指と人差し指の間に、真っ白い包帯が巻かれていた。「先生、どうしたんですか」と聞くと、「何が原因かわからないんだが、痛くてしょうがないんだ」。小針が少々のことでも包帯を巻くことはなかったから、「医者に診てもらわないといけませんよ」と外科医の診断を強く勧めた。

専門医の診断は、親指と人差し指の間で複雑骨折しており、折れた骨の破片が浮いて、それが神経に当たって炎症を起こし、痛みにつながっているということだった。医師からは手術をして本格治療を勧められたが、医者嫌もあって、「そんなことしたら、ゴルフがやれなくなってしまう」と、鎮痛剤でごまかし、包帯を巻いてそのまま固めてしまった。

小針は「どうしてあんなことになってしまったのか」と、不安をつのらせた。その原因を解明する手がかりは、那須ゴルフ倶楽部の応接室に掛けられていた、小針のドライバーのスイング写真にあった。小針は右手の平をグリッパから離し、親指と人差し指だけで握って打つから、ヘッドがボールに



当たる瞬間時の衝撃を、親指と人差し指の付け根の部分がもろに受け、複雑骨折を起こしたに違いない。

写真の指の付け根を指さして、「先生、これですよ、これ」と言うと、小針は「そうか。それか」と納得した。青山を訪ねたのは、そのまま固めてしまった後のことだったかもしれない。それにしても、あくなき探求心と、障害を自分で克服しようという執念に驚かされた。

(つづく)

編集後記

開場 50 周年の記念祭をやったのが、ついこの間のような気がする。この間、コロナ禍というパニックが地球規模で起こり、人類は経験したことのない日常を強いられた。恵まれた自然の中で思い切りクラブを振って、プレーを満喫できるようになったことに感謝したい。塩カンのコースも国体開催を機にした整備のおかげで、見違えるようなコースとなった。そのクラブのメンバーであることに誇りを感じ 60 周年、いや世紀を目指して新たな時代を拓いて行きたい。

井上安正

